

ベーコン、スピノザ、ルソー

－自然主義における力の内在化－

中 井 裕 之

Bacon, Spinoza, Rousseau:
Interiorization of power in Naturalism

NAKAI Hiroyuki

は じ め に

ヨーロッパ中世においては、人間・社会を導く原理はキリスト教の体系の中にあり、人間が幸福へと至る力は恩寵（*gratia*）として神により与えられた。ところがこの神中心の中世（神を中心として体系づけられた中世）が、世俗化された人間中心の近代へと移行すると、拠って立つべき新しい原理が求められることとなる。近代における自然主義の思想はそうした動向の中で現れたものである。つまり神に代えて自然（*natura*）が新たな拠り所にされたのである。ベーコン（Francis Bacon, 1561-1626）による学の大革新（*instauratio magna*）の試みもそうしたものであった。ベーコンは中世キリスト教哲学としてのスコラ学を批判し、偏見（「イドラ *idola*」）を排しつつ自然に虚心に耳を傾けるべきことを説いた。そして自然に従うことで人間はそこから力を得ることが出来ると考えた。ここにはルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）やペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827）、またフレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852）らに連なる近代自然主義思想の淵源が見て取れる。そこには自然（*natura*）に従う思想の系譜がある。しかしベーコンが外的自然に従うことで、そこから力を得ようとしたのに対し、ベーコン以降の自然主義思想の展開においては、その力は次第に人間に内在化されて行く。そして人間は力を内在化させることで自立的主体となって行く。つまり人間は自らを導く拠り所を、神から自然（外的自然）へそして人間（内的自然）へと移して行くのである。自然主義の展開において神的なるものは自然を経由して人間に取り込まれてゆく。

18世紀に活躍したルソーは、言うまでもなく自然主義の思想を唱えた代表的論者の一人であるが、ルソーにおいては人間を導く力の人間そのものへの内在化が見て取れる。ルソーは『エミール』（*Émile ou De l'éducation*, 1762）において、内的自然としての人間の本性（*natura*）に従う人間形成の思想を展開したが、ここには、それ自身で完結した自立的個としての近代人の姿がある。ルソーは自立した人間を誕生させた。そしてそれは今日の人間像でもある。

本稿の目標は自然主義の思想の展開に、自らを導く力の人間自身への内在化の過程を見ること

である。ここでは特にスピノザ (Benedictus de Spinoza, 1632-1677) の思想を媒介としつつ、ベーコン、スピノザ、ルソーの三者の思想の比較を行いたいと思う。スピノザを持ち出すのは、17世紀に生きたスピノザの思想のうちには、ベーコンからルソーへの思想の推移の跡が刻み込まれているからである。ベーコン、スピノザ、ルソーの三者には類似と差異がある。三者の差異は内在性である。スピノザの光に照らして力の内在化の問題を見てみたい。

1. ルソーの自然主義：内的自然

ルソーが彼の著作の中で最も重要なものと自ら位置づける『エミール』⁽¹⁾の巻頭の言葉は、「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手につくとすべてが悪くなる (Tout est bien, sortant des mains de l'auteur des choses: tout dégénère entre les mains de l'homme)」⁽²⁾ というものである。この言葉のうちには自然はよきものであり、人間も自然的にはよきものであるというルソーの考えが示されている。「万物をつくるもの」つまり神が人間に善性を与えたということは人間は自らを抛り所にしてよいということである。

『エミール』においては自然的教育が論じられるが、この背景には当時の百科全書派の「哲学」に対する批判がある。百科全書派の「哲学」は少なくともルソーの眼には不毛に映った。ルソーにとって真実は不毛な「哲学的」議論のうちにあるのではなく、むしろ自然そのもののうちにある。ルソーの思想に対するスローガンとしてしばしば「自然に還れ」という言葉があげられるのもそのためである。ルソーは文化のうちにはなく、人間の自然の内に人間を導く力を見出したのである。

だが、このことは『学問・芸術論』(*Le Discours sur les sciences et les arts*, 1750) にすでに現れている。実際彼はそこで学問・芸術が習俗の堕落をもたらすとしている。ルソーは音楽家、文学者、思想家といくつかの顔を持つが、第一論文とも呼ばれる『学問・芸術論』は思想家としてのルソーの処女作に当たる。それは元来、1749年に『メルキユール・ド・フランス (Mercure de France)』誌に掲載されたディジョンのアカデミー (l'Académie de Dijon) の懸賞論文の課題、つまり「学問と芸術の復興は習俗を純化することに寄与したか (Si le rétablissement des sciences et des arts a contribué à épurer les mœurs)」に応募し受賞したものである。ルソーは、「この課題を読んだ瞬間に、私は別の世界を見、別の人間になった (A l'instant de cette lecture je vis un autre univers, et je devins un autre homme)」⁽³⁾ と言う。つまりルソーはこの瞬間に人間の自然的善性を見出したのである⁽⁴⁾。そしてその思想ないし靈感は『人間不平等起源論』(*Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, 1755) へ、そしてさらに『エミール』へと引き継がれ展開されることになる。ルソーはこうしたことを1762年1月12日付マルゼルブ院長 (M. le Président de Malesherbes) 宛て書簡 (「マルゼルブ院長あての四通の手紙」二) において次のように述べている。

「そのころヴァンセンヌに監禁されていたディドロに会いに行く途中でした。私はポケットに『メルキユール・ド・フランス』誌を入れておいたのですが、歩きながらそれを読みはじめました。ディジョンのアカデミーの課題が目にはいりました。わたしの最初の著作を書かせることに

なった課題です。なにか突然の靈感といったようなものがあつたとしたら、その課題を読んだとき、わたしの内部に起こった動きはまさにそういったものです。急にわたしはあふれる光りに精神が照らされるのを感じました。…わたしは、酔ったときのように、頭がしびれるのを感じました。…歩きながら呼吸することもできなくなって、わたしは道ばたの木かげに倒れるように身を横たえ、そこでひどい興奮のうちに半時間をすごしました。…ああ、あの下でわたしが見たこと、感じたことの四分の一でも書くことができたなら、人間は生まれつきよい者であること、人々が悪くなるのはただその制度のためであることをどれほど簡明に示したことでしょう。十五分のあいだにあの木の下でわたしに光明をあたえてくれた無数の偉大な真理のうちからわたしがとらえることができたことのすべては、まったく弱々しい形で、わたしの三つの主な著作のなかにちらばっています。それは、あの最初の論文と『不平等論』と『教育論』で、これら三つの著作は分けられないもので、まとまった一つの全体を形づくっているのです。⁽⁵⁾」

第二論文と呼ばれる『人間不平等起源論』も、もともとは懸賞論文の為に書かれたものであった。それは1753年にディジョンのアカデミーが出した懸賞論文の課題、「人々の間における不平等の起源はなにか、それは自然法によって是認されるか (Quelle est l'origine de l'inégalité parmi les hommes et si elle est autorisée par la loi naturelle ?)」に向けて書かれたものであった。しかしルソーは今度はその受賞を逃している。

『人間不平等起源論』においてルソーは自然状態を仮想し、そこに人間の本性を見ようとする。それは1749年に懸賞論文の課題を見て得た靈感を、自然状態を仮想することで基礎づけようとするものである。ここでもルソーは人間の自然的善性を説き、そして文化・社会に人間の不平等の起源を見る。ルソーによれば自然状態にある自然人には不平等はない。自然状態において人間は「自己愛 (amour de soi)」という自然的感情を持つが、社会状態においては人間は「利己心 (amour propre)」を持つ。人間に文化・社会の垢が付くことで風俗の退廃がもたらされるとしたのが『学問・芸術論』であり、人間に文化・社会の垢が付くことで不平等がもたらされるとしたのが『人間不平等起源論』である。

『エミール』は、『人間不平等起源論』において展開された一種の作業仮説としての自然的状態における人間についての議論をさらに発展させ、人間論・教育論としたものである。文化・社会は人間を毒するのみであるが、人間が内に善なる本性を持つのならばむしろそれを振り所とし、それを開花させることが重要となる。ルソーは『エミール』において人間の自然の内に人間を導く力を見出す。それゆえルソーにおいて教育とはこの自然的力を曲げずに伸ばしてやることにある。

『エミール』でルソーは教育には三種類あるという⁽⁶⁾。それは「自然の教育 (l'éducation de la nature)」, 「人間の教育 (l'éducation des hommes)」, 「事物の教育 (l'éducation des choses)」である。「自然の教育」とは「わたしたちの能力と器官の内部的発展」のことであり、「人間の教育」とはその人間の能力と器官の発達をいかに利用すべきかを教える人間の働きかけのことであり、「事物の教育」とは事物の刺激によって獲得される人間の経験のことである。ルソーは「人間の教育」と「事物の教育」を「自然の教育」に一致させなければならないとする。「自然の教育」があらゆる種類の教育を導くのである。それゆえ子供は発達に応じた教育がなされなければ

ならない。

ここにルソーは間違いなく自然主義の系譜に連なることになる。しかしそれはベーコン的ありようにおいてではない。ベーコンは外的自然の「下僕」たることをその哲学の原理とした⁽⁷⁾からである。ベーコンは『新機関』(*Novum Organum*, 1620)の中で次のように言う。「自然の下僕であり解明者である人間は、彼が自然の秩序について、実地により、もしくは精神によって観察しただけを、為しかつ知るのであって、それ以上は知らないし為すこともできない⁽⁸⁾」と。ベーコンにおいては外的自然は規範としての自然である。しかしルソーにおいてはその規範は内的自然に見出される。そして規範が内に取り込まれることによって、それは人間を導く力となるのである。自然主義の展開に力の内在化は深く関わっている。ルソーは文化・社会との対立の図式において自然に目を向けたが、その裏では規範の人間への内在化が行われ、人間は自己自身を抛り所とするようになることで人間は自らのうちに自らを導く力を有するようになる。ここには近代人の姿が垣間見える。

『エミール』と同じ年に発表された『社会契約論』(*Du Contrat social, ou principes du droit politique*, 1762)においてもルソーは善性を備えた自立的な主体を前提としている。つまりそうした自立的主体者間の契約としてルソーは社会契約を考える。『社会契約論』の課題は自立的主体をいかにして社会的に保証するかにあり、それゆえルソーはこの書において民主主義を説く。したがってルソーにおいて人間は本性的に善性を備え力を内在化させた自立的主体なのである。『エミール』の課題は自立的主体の個的实现であり、『社会契約論』の課題は自立的主体の社会的保障である。

II. スピノザの自然主義：汎神論

主著『エティカ』(*Ethica*)⁽⁹⁾においてスピノザは言う。「徳と能力とを同一のものと私は解する。言い換えれば、人間について言われる徳とは、人間が自己の本性の法則のみによって理解されるようなあることをなす能力を有する限りにおいて、人間の本質ないし本性そのもののことである」(*Eth. IV, Def. 8*)⁽¹⁰⁾と。スピノザは自己固有の本質性を示すことのうちに人間の完成を見る。「真に有徳的に働くとは自己固有の本性の法則に従って働くことにはかならない」(*Eth. IV, Prop. 24, Demonstr.*)⁽¹¹⁾

さて、スピノザは人間が自己の本質性を開示しようとする努力を「コナトゥス (*conatus*)」と呼ぶ。コナトゥスはラテン語で一般に「努力」、「試み」、「衝動」といった意味であるが、それをスピノザは次のように説明している。

「この努力 (*conatus*) が精神だけに関係する時には意志 (*Voluntas*) と呼ばれ、それが同時に精神と身体とに関係するときには衝動 (*Appetitus*) と呼ばれる。したがって衝動とは人間の本質そのもの、一自己の維持に役立つすべてのことがそれから必然的に出て来て結局人間にそれを行わせるようにさせる人間の本質そのもの、にほかならない。次に衝動と欲望の相違とはいえば、欲望は自らの衝動を意識している限りにおいてもっばら人間について言われるというだけのことである。このゆえに欲望 (*Cupiditas*) とは意識を伴った衝動であると定義することができ

る。」(Eth.Ⅲ, Prop. 9, Schol.)

ところで彼は「神 (Deus)」のみを実体 (substantia) とし、人間を含めた一切の個物を「神」の変状 (様態)⁽⁹²⁾ と捉える。スピノザの哲学が汎神論と呼ばれるゆえんである。したがって「すべては一定の仕方 で存在し・作用するように神の本性の必然性から決定されている」(Eth. I, Prop.29) のであり、また「いかなる物も自分が滅ぼされうるようなあるものを、あるいは自分の存在を除去するようないあるものを、自らの中に有していない」(Eth.Ⅲ, Prop. 6, Demonstr.). よって「おのおの物は自己の及ぶかぎり自己の有に固執するように努める (Unaquaeque res, quantum in se est, in suo esse perseverare conatur)」(Eth.Ⅲ, Prop. 6) ことになる。「コナトゥス」とはスピノザにおいてそうした自己実現へ向かう力、あるいは自己固有の本質性を示そうとする力のことをいう。

ところが、人間が非妥当な認識を持つとき、人間の欲望 (コナトゥス) は人間固有の本性を示そうとはしない。「精神は明瞭判然たる観念を有する限りにおいても、混乱した観念を有する限りにおいても、ある無限定な持続の間、自己の有に固執しようと努め、かつこの自己の努力 (conatus) を意識している」(Eth.Ⅲ, Prop. 9)⁽⁹³⁾ のである。しかし同じ欲望と言えども両者の間には相違がある。例えて言うならば「酔漢の捉われている楽しさと、哲学者の享受している楽しみの間には、少なからぬ相違がある」(Eth.Ⅲ, Prop.57, Schol.) ようなものである。

「欲望には喜び、悲しみ、愛などの種類だけ多くの、したがってまた我々を刺激する対象の種類だけ多くの、種類が存する」(Eth.Ⅲ, Prop.56, Demonstr.) のであり、またその「欲望は、各人の本質ないし本性がその与えられたおのおのの状態においてあることをなすように決定されたと考えられる限り、その本質ないし本性そのものである」(Eth.Ⅲ, Prop.56, Demonstr.)⁽⁹⁴⁾。欲望が人間固有の本質性となるためには人間は妥当な認識を有しなければならない。スピノザは言う。「人間が非妥当な観念を有することによって行動するように決定される限り、その限り彼は働きを受ける、言いかえれば、その限り彼は自己の本質のみによって知覚されえないある事、すなわち自己の徳から起こらないある事をなすのである。これに反して彼が認識 [妥当な認識]⁽⁹⁵⁾ することによって行動するように決定される限りその限り彼は自己の本質のみによって知覚されうるある事、すなわち自己の徳から妥当に起こるある事をなすのである」(Eth.Ⅳ, Prop. 23, Demonstr.)⁽⁹⁶⁾ と。

人間の欲望がいかなるものとなるかは認識のありようにかかっている。非妥当な認識を有することによって人間は非本性的となり、妥当な認識を有することによって人間は本性的となるからである。

したがってスピノザにおいて人間の完成は最高の認識を得ることに求められる。『知性改善論』(Tractatus de intellectus emendatione)⁽⁹⁷⁾ においてその最高の認識は「精神と全自然との合一性の認識 (cognitio unionis quam mens cum tota Natura habet)」(TIE13) とされる。そしてそれは同時に「神」の認識 (「神」を認識すること) を意味する。というのも一切の個物は「神」の変状 (様態) であり、「神」のみが実体であるからである。つまり「神」即「自然」であるからである。それゆえ「神」を認識することは同時に全自然を直観的に認識することになる。よって『エティカ』においてそれは「直観知 (scientia intuitiva)」と呼ばれる⁽⁹⁸⁾ のである。この「直観知」(あるいは「精神と全自然との合一性の認識」) において人間の欲望 (コナトゥス)

は自己の本質性を示すものとなり、また「全自然の秩序と一致する」ことになる。なぜなら「我々は妥当に認識する限りにおいて、必然的なもの以外の何ものも欲求しえず、また一般に、真なるもの以外の何ものにも満足しえないからである」(Eth.Ⅳ, Appendix, Caput32)。

ここにコナトゥスは人間の本質性を示す力であると同時に「神」ないし「自然」を一定の仕方で表現する力であるということになる。したがってコナトゥスは人間の自己実現へ向かう力、あるいは自己固有の本質性を示そうとする力でありつつ、「神」ないし「自然」の発現の力であるということになる。

人間(個物)は「神」(「神」の属性)の変状(様態)に外ならない。「人間は神の中に在りかつ神なしには在ることも考えられることもできないものである。言いかえれば神の本性をある一定の仕方で表現する変状あるいは様態である(Est ergo aliquid, quod in Deo est, et quod sine Deo nec esse, nec concipi potest, sive affectio, sive modus, qui Dei naturam certo, et determinato modo exprimit)」(Eth.Ⅱ, Prop.10, Corol., Demonstr.).また、「個物は神の属性の変状、あるいは神の属性を一定の仕方で表現する様態、にはかならない(Res particulares nihil sunt, nisi Dei attributorum affectiones, sive modi, quibus Dei attributa certo, et determinato modo exprimuntur)」(Eth.Ⅰ, Prop.25, Corol.).よって「おのおの物が自己の有に固執しようと努める努力はその物の現実的本質にはかならない(Conatus, quo unaquaeque res in suo esse perseverare conatur, nihil est praeter ipsius rei actualem essentiam)」(Eth.Ⅲ, Prop.7)が、それは同時に「神」あるいは「自然」の能力ということになるのである。それをスピノザは次のように表現している。

「個物が、したがってまた人間が、自己の有を維持する能力は神あるいは自然の能力そのものであるが、しかしそれは無限なる限りにおける神あるいは自然の能力そのものではなく、人間の現実的本質によって説明されうる限りにおける神あるいは自然の能力そのものである。(Potentia, qua res singulares, et consequenter homo suum esse conservat, est ipsa Dei, sive Naturae potentia, non quatenus infinita est, sed quatenus per humanam actualem essentiam explicari potest.)」(Eth.Ⅳ, Prop.4, Demonstr.)

スピノザにおける「自己保存の努力(コナトゥス)」は、人間が自らのうちに取り込んだ力であるのではなく、人間が「神」(即「自然」)の変状(様態)である限りでの人間の力である。したがってそれは人間の力でありつつ「神」ないし「自然」の力なのである。また人間の本性も人間に埋め込まれたものではなく、「神」(即「自然」)の変状(様態)である限りでの本性である。

ところでベーコンの場合、自然の力は人間がそれに従うことで初めて人間にとっての力となる。ベーコンにおいては自然は人間の従うべき規範である。したがってベーコンの場合には人間の本質性を育て開花させることではなく、むしろ人間の本質である偏見(「イドラ」)を取り除き⁽⁹⁾虚心に外的自然に従うことが重要となる。

しかしルソーにおいてはその規範は人間に取り込まれ、内的自然として人間の本性(人間の自然)となる。そして規範が内に取り込まれることによって、それは人間を導く力となる。ルソーにおいては人間が自らを導く力は人間そのものの内に内在化される。したがってルソーにおいて

それは端的に人間の力である。ルソーにおいて教育とはこの内在的力を曲げずに伸ばしてやることに、つまり人間に内在化された「自然」を開花させることにある。

結　　び

ベーコン、スピノザ、ルソーを一つのラインに乗せて見た場合、そこには自然主義思想におけるある種の展開が見て取れる。それはひとことで言えば力の内在化ということである。あるいはそれは規範の内在化と言ってもいいかもしれない。少なくともここで言う自然主義とは、自然を規範とした人間形成のあり方を指すが、ベーコンからスピノザそしてルソーへと向かう思想の展開においてこの規範は次第に人間へと取り込まれてゆくことになる。そしてこの規範が人間へと取り込まれることでそれは人間を導く力となる。

ベーコンにおいて自然とは外的自然であり、それは人間の従うべき規範であった。ところがスピノザを経てルソーに至っては自然とは内的自然であり、それは人間を導く力となっている。ベーコンからルソーへの思想の展開のなかで自然は人間へと取り込まれてゆく。つまり人間は自らを導く拠り所を、自然（外的自然）から人間（内的自然）へと移してゆくのである。

この自然主義の展開において力の内在化は決定的である。ルソー以前とルソー以後では大きなパラダイムの転換が見られる。というのも、その自然主義思想において力の内在化を果たしたルソーにおいては、自らの足で立たんとする近代人の姿が見えるからである。その意味でルソー以後を真の近代とし、ルソー以前を近世（early modern）とする時代区分も成り立つのではなかろうか。ともかく、ルソーは自然主義思想において力の内在化を成し遂げた人物である。

ところで、ベーコンとルソーの間にスピノザを介在させると、この自然主義における力の内在化はより鮮明になる。スピノザの思想はベーコンとルソーの思想を繋ぐ役割を果たすからである。

スピノザにおいて人間の最高の完成とは、「神」の認識（「神」を認識すること）により実現される「コナトゥス」の実現である。そしてそれは全自然を体現することであると同時に自己の本性を体現することを意味する。ここにスピノザの思想は自然主義的特徴を有することになるが、この「コナトゥス」はスピノザによれば「神」ないし「自然」の力そのものであると同時に人間の現実的本質としての力とされる。人間は「神」ないし「自然」の変状（様態）であるからである。ベーコンの場合は人間を導く拠り所は外的自然であり（規範ないし力の外在）、ルソーの場合は人間を完成へと導く拠り所は内的自然である（力の内在）。スピノザの場合は「神」ないし「自然」は人間と重なり合い、「神」ないし「自然」の力は人間の力と重なり合うのである。

したがってスピノザの思想は自然主義思想の展開においてベーコンとルソーの中間に位置する。それはベーコンからルソーへと自然が人間のうちに取り込まれる過渡である。スピノザの思想のうちには力が人間へと内在化されてゆく過程の跡が見て取れる。

自然を規範とする自然主義の思想は、ルソー以後人間に内在化された自然つまり本性的なるものに従う（人間形成の）思想へ向かう。そこには人間を導く力の人間そのものへの内在化がある。ルソーにおいて自然は人間の中に組み込まれ、人間が自らを導く拠り所は内在化された自然（本性）つまりは人間自身となるからである。ルソーにおいては人間を導く力は人間自身にあり、それが神や自然の力そのものであるとはもはや捉えられない。ベーコンの場合であれば規範は外的

自然であり人間はその外的自然に従わなければならなかったが、ルソーにおいてその規範性は人間に内在化された。ここから近代人は自らを抛り所とせねばならなくなる。

近代人は自らを抛り所として生きようとして来たがその結果、我々はニヒリズムに陥っている。すなわち今日我々は神なき時代の中で、抛り所を失っている。今や我々は人間が本当に抛り所とすべきものを問い返さなければならない。その際、人間と「神」ないし「自然」の絶妙な関係を示すスピノザの思想が大きな手引きとなるのではなかろうか。

〔付記〕

本研究は科学研究補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

〔註〕

- (1) ルソーは『エミール』を、『告白』(*Les Confessions*)において、「私の最終かつ最良の作品 (mon dernier et meilleur ouvrage)」, また「私の最も価値のある最良の書物 (mon plus digne et meilleur livre)」と言い、『対話, ルソー, ジャン=ジャックを裁く』(*Dialogues: Rousseau juge de Jean-Jacques*)において、「自己の最も偉大で最良の作品 (son plus grand et meilleur ouvrage)」と言っている。Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres Complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, t. I, p.566, p.568, p.687.
- (2) ルソー (今野一雄訳)『エミール(上)』岩波書店 (岩波文庫), 1962年, 23頁 (*Œuvres Complètes*, t. IV, p.245)。
- (3) Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres Complètes*, t. I, p.351.
- (4) 沼田氏は、ルソーの自然的善性の発見にヴァラン夫人との出会いが大きな役割を果たしていることを指摘している。沼田裕之『ルソーの人間観』風間書房, 1980年, 86-87頁。
- (5) ルソー (今野一雄訳)『エミール(下)』(付録:「マルゼルブへの手紙」) 岩波書店 (岩波文庫), 1964年, 300-301頁 (*Œuvres Complètes*, t. I, pp.1135-1136)。
- (6) 『エミール(上)』, 24頁以下 (*Œuvres Complètes*, p.247ff.)
- (7) ベーコンはこの原理は諸学に、つまり「自然哲学」, 「論理学」, 「倫理学」, 「政治学」に適用されるという。Bacon, *Novum Organum*, Aphorismus〔第一巻〕127 (ベーコン著・桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム』岩波文庫, 1978年, 191頁)。
- (8) ベーコン (桂寿一訳)『ノヴム・オルガヌム』岩波書店 (岩波文庫), 1978年, 69頁 (*Novum Organum*, Aphorismus〔第一巻〕1)。
- (9) 詳しくは『幾何学的秩序で論証されたエティカ』(*Ethica ordine geometrico demonstrata*)。1667年12月に死後出版された。なお本稿ではスピノザのテキストの原典は *Spinoza Opera*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, herausgegeben von Carl Gebhardt, Heidelberg: Carl Winter, 1925を使用。訳文は岩波文庫の畠中尚志訳 (『エチカ』上・下, 1951年) による。引用に際してはEth. と略し, 続くローマ数字で部を示す。また Prop.=定理, Schol.=備考, Corol.=系, Demonst.=証明, Def.=定義, Axioma=公理, Appendix=付録, Caput=項である。
- (10) 《Per Virtutem, et potentiam idem intelligo, hoc est virtus, quatenus ad hominem refertur, est ipsa hominis essentia, seu natura, quatenus potestatem habet, quaedam efficiendi, quaeper solas ipsius naturae leges possunt intelligi.》(Eth. IV, Def. 8)
- (11) 《Ex virtute absolute agere, nihil aliud est, quam ex legibus propriae naturae agere.》(Eth. IV, Prop. 24, Demonst.)
- (12) スピノザは『エティカ』において次のように言っている。「様態とは、実体の変状、すなわち他のもののうちに在りかつ他のものによって考えられるもの、と解する。(Per modum intelligo

- substantiae affectiones, sive id, quod in alio est, per quod etiam concipitur.)」(Eth. I, Def. 5)
- (13) 《Mens tam quatenus claras, et distinctas, quam quatenus confusas habet ideas, conatur in suo esse perseverare indefinita quadam duratione, et hujus sui conatus est conscia.》(Eth. III, Prop. 9)
- (14) 《Cupiditas est ipsa uniuscujusque essentia, seu natura, quatenus ex data quacunque ejus constitutione determinata concipitur ad aliquid agendum》(Eth. III, Prop. 56, Demonstr.)
- (15) ブラット[]内は畠中氏による補足である。
- (16) 《Quatenus homo ad agendum determinatur ex eo, quod inadaequatas habet ideas, eatenus patitur, hoc est, aliquid agit, quod per solam ejus essentiam non potest percipi, hoc est, quod ex ipsius virtute non sequitur. At quatenus ad aliquid agendum determinatur ex eo, quod intelligit, eatenus agit, hoc est, aliquid agit, quod per solam ipsius essentiam percipitur, sive quod ex ipsius virtute adaequate sequitur.》(Eth. IV, Prop. 23, Demonstr.)
- (17) 詳しくは『知性の改善に関する、並びに知性が事物の真の認識に導かれるための最善の道に関する論文』(*Tractatus de intellectus emendatione, et de via, qua optime in veram rerum cognitionem dirigitur*)。未完の論文であり、『エティカ』などと共に『遺稿集』(*Opera Posthuma*)として1677年12月に死後出版された。引用に際しTIEと略し、続けてブルーダー版の数字により引用箇所を示す。
- (18) 「第三種の認識 (cognitio tertii generis)」とも呼ばれる。なお、「第一種の認識 (cognitio primi generis)」とは「意見 (opinio)」ないし「想像知 (imaginatio)」のことであり、「第二種の認識 (cognitio secundi generis)」とは「理性知 (ratio)」のことである。
- (19) ベーコンによれば、人間には四つの偏見(「イドラ」)があるという。それは「種族のイドラ」、「洞窟のイドラ」、「市場のイドラ」、「劇場のイドラ」である(*Novum Organum*, Aphorismus〔第一巻〕39/『ノヴム・オルガヌム』岩波文庫 83頁)。「種族のイドラ」とは「人間の本性そのもののうちに、そして人間の種族すなわち人類のうちに根ざしている」偏見(イドラ)である(41/84頁)。「洞窟のイドラ」とは「人間個人のイドラ」である(42/84頁)。「市場のイドラ」とは「人類相互の交わりおよび社会生活から生ずる」イドラである(43/85頁)。「劇場のイドラ」とは「哲学のさまざまな教説ならびに論証の誤った諸規則から」生ずるイドラである(44/85-86頁)。

〔引用・参考文献一覧〕

大瀬甚太郎『欧州教育史』成美堂, 1935年

梅根悟『教育史学の探求』講談社, 1966年

『世界の名著30 ルソー』(責任編集 平岡昇) 中央公論社, 1966年

ルソー(前川貞次郎訳)『学問芸術論』岩波書店(岩波文庫), 1968年

ルソー(本田喜代治・平岡昇訳)『人間不平等起原論』岩波書店(岩波文庫), 1933年

ルソー(今野一雄訳)『エミール』上・中・下, 岩波書店(岩波文庫), 1962, 1963, 1964年

ルソー(桑原武夫・前川貞次郎訳)『社会契約論』岩波書店(岩波文庫), 1954年

沼田裕之『ルソーの人間観』風間書房, 1980年

鈴木瑋雄『「教育」と「自然」』明治図書, 1984年

Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres Complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard.

Robert Wokler, *Rousseau*, Oxford University Press, 1955 (山本周次訳『ルソー』晃洋書房, 2000年)

ベーコン(桂寿一訳)『ノヴム・オルガヌム』岩波書店(岩波文庫), 1978年

『世界の名著25 ベーコン』(責任編集 福原麟太郎) 中央公論社(中公バックス), 1996年

- The Works of Francis Bacon, Bd.1 [Faksimile-neudruck der Ausgabe von Spedding, Ellis and Heath, London, 1858], stuttgart: Frommann, 1963
スピノザ (畠中尚志訳) 『エチカ』上・下, 岩波書店 (岩波文庫), 1951年
スピノザ (畠中尚志訳) 『知性改善論』岩波書店 (岩波文庫), 1931年
Spinoza Opera, im Auftrage der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, herausgegeben von Carl Gebhardt, Heidelberg: Carl Winter, 1925
J.Freudenthal, Spinoza. Leben und Lehre, Heidelberg: Carl Winter, 1927 (J.フロイデントー
ル著・工藤喜作訳『スピノザの生涯』暫書房, 1982年).

(日本学術振興会特別研究員; 博士後期課程2回生 教育学講座)